

□ 「楽つみ木広場」の実施概要

「楽つみ木広場」は、教室や集会施設などで、つみ木を共同制作するのが基本です。対象は、幼稚園児～小学生生徒などの子どもが中心ですが、親子、孫子など世代間の共同制作も可能です。

保育園、幼稚園、小学校で行う場合は1クラス程度の参加者のケースが一般的ですが、イベントのケースでは体育館などで100名以上が参加することもあります。

所要時間は100分程度。その他60分ほどの準備時間が必要になります。

項目	内容
1. 対象者	子ども(イベントの場合、子どもから大人まで)
2. 年齢層	3～9歳 (イベントの場合、高齢者まで)
3. グループの大きさ	30～50名(イベントの場合、200名程度まで)
4. 場所	教室、集会室、体育館、病院(イベントの場合ホールなど)
5. 時間	100分

□「楽つみ木広場」のプログラム

「楽つみ木広場」は、参加する子どもが、つみ木に親しみ、自由につみ木を製作するとともに、共同制作へといざなうための動機付けプログラムです。これは、木楽舎が行ってきた「つみ木広場」の経験から改良してきたもので、基本的なプログラムは次のようになります。

1. 受付・入場・挨拶



- 参加者の確認・名札の確認、参加者への声かけ
- 広場として赤いじゅうたん
- 車座になる、全員での挨拶、拍手の練習

「……………こんにちは」

2. 積み木シャワー



- つみ木を手にとってもらい、簡単なルールの説明
- みんなで積み木とのふれあいを体験する
- 目をつぶって積み木を体にかける。全身で感じる

「生きる力が、ここで発芽する」

3. 自由製作



- 3種のつみ木で自由に製作する
- 試してみようとする気持ちを大切にする
- 名指しして声をかける、違うことをほめる

「最後の一つ、手がふるえるよ」

4. 作品を見る



- 広場(じゅうたん)の外から見る
- 自分以外の作品を見る、違いを考える
- 体験を省察する・アイデアを吸収する

「支える、支えあう、ひらめき、子どもは芸術家」

5. 崩し



- 積み木に感謝し、自分の作品を崩す。
- 座って、正座して、抱きしめて崩す
- 作品(自分)の大切さと、決別する心を養う

「見て、見て、これ」

6. 再チャレンジ



- いつもと違う仲間と共同制作にチャレンジする
- 体験を応用する
- 動物園、ケーキなどの課題を与える

「積み木が見る見る大きくなるよ」

7. つなげる



- 自発的なグループ活動を促す
- 作品をつなげ、共同制作を促す
- 仕上げに親が参加

「もう一つ、のせたいな」

8. 見つめる



- 5, 4・・・1 と数えて全員で見る
- 作品全体に拍手し、全体と自分の作品(活動)を見る
- 1つ1つを紹介する、共通体験を表現する

「できたあ・・・」

9. 崩しと後片付け



- 積み木への感謝と後片付け
- 正座して抱くように崩す
- 後片付けもやさしく

「積み木さん、ありがとう」

10. 感想



- 新たな体験を表現する。
- 他人の感想を聞く。他人の体験に共感する。

□「楽つみ木広場」から仲間づくりを

「楽つみ木広場」は、子どもが出会い、つみ木という遊びを通して相互に学びあう、広場です。この広場は、保育所、幼稚園、小学校のほか、病院、図書館、集会・交流施設、福祉施設、公園、ショッピングセンター、林間学校などでも、開催可能です。

木楽舎では、さまざまな場所で「つみ木広場」の開催に向け、コミュニティ、企業、行政、NPO団体と協働し、社会とともに成長していきたいと思えます。

■木楽舎の経緯

- 1985年 子どもの教育のため「しなの教育」が定着している長野に移住、商社マンから転進。家具作家としての修行を始める。
「ワイン家具」分野に目覚め、山梨に工房「木楽舎」開設
「森を核とした地域づくり研究会(落穂ひろいの会)」に参加
- 1988年 八ヶ岳カウンティフェア(ポールラッシュ祭)に手作り家具出展、
ポールラッシュ博士の教え“最善を尽くせ、一流であれ
“Do your best and it must be first class“に出会う。
以後20年間、毎年出展。
- 1998年 カウンティフェアでヒノキの間伐材を利用した積み木を発表。
「楽つみ木」の誕生
- 2000年 「丸ビル」の基礎として土中に埋め込まれていたオレゴンパイン(米松杭)
に出会い、「樹齢100年、丸ビルを支えておよそ100年、これから、100
年子どもたちのためにつみ木を」と提案。5443本の杭材の中から、70
本を譲り受け、20万セットの「楽つみ木」を製作。
- 2001年 第52回全国植樹祭が山梨県で開催され、「木の国サイト」において1万個
の「つみ木広場」を開催。赤いじゅうたんを敷く「楽つみ木広場」の誕生
- 2002年 朝日新聞「暮らしの風」3・4月号に辰濃和男(日本エッセイスト・クラブ専
務理事)が「旧丸ビルの松杭でベンチと積み木を創る」「積み木で《夢》を創
る」を連載
- 2005年 東京多摩市「多摩センター子ども祭り」に出展
テレビ朝日全国放送「いきいき夢キラリ」出演
愛・地球博エキスポドーム「小さな積み木広場」
- 2006年 NHK総合TV全国放送「つみ木広場へようこそ」出演
英国ロンドン市内小学校5校をつみ木交流訪問
日本経済新聞朝刊文化欄に「楽つみ木広場」が紹介される
NHKラジオ「朝いちばん」出演
- 2007年 NHK放送センター「エコスタイル・ストリート」出演
NHKラジオ「朝いちばん」出演
CBC「楽つみ木」イッポウ特別番組出演
小学館「3、4、5保育」楽つみ木紹介、キッズチャレンジ(有明出版)
東京国際フォーラム「丸の内キッズフェスタ」出展
- 2008年 キッズデザイン賞受賞
山梨大学医学部小児科病棟で入院児童を対象とした「楽つみ木広場」
の開催

■ 「つみ木広場」の開催実績

□ 保育園・幼稚園・学童クラブ

子どもの家保育園(札幌市)
ハレルヤ保育園(岩手県)
守谷市学童クラブ(茨城県)
太田市学童クラブ(群馬県)
鹿骨保育園(江戸川区)
あすなる幼稚園(江戸川区)
てるみ幼稚園(静岡県)
杉の子保育園(岩手県)
蒲田ルーテル幼稚園(大田区)
田園調布ルーテル幼稚園(世田谷区)
西条ルーテル幼稚園(広島県)
慈光保育園(甲府市)
マナ愛児園(茨城県)
とねっこ保育園(茨城県)
日下部保育園()
ひまわり幼稚園(都留市)
安中双葉幼稚園(群馬県)

□ 小中学校

相川小学校()
竜王東小学校(甲斐市)
六郷小学校()
久那土中学校()
上野原小学校(上野原市)
鳥沢小学校()
和見分校()

□ 学童クラブ等

守谷市学童クラブ(茨城県)
太田市学童クラブ(群馬県)

□ その他

山梨県立女子大学
山梨県立美術館
キープ協会 清泉寮
安中双葉幼稚園(群馬県)
山梨県社会福祉協議会
甲府市子どもいきいき推進課・子どもクラブ
玉川大学芸術学部
丸善丸ビル店
新橋国際フォーラム
ロンドン

このほか、幼稚園・保育園・小学校・中学校・大学・学道保育・福祉施設・病院・イベント会場など毎年全国50箇所で開催。

■主要紹介記事等(抜粋)

□丸ビルの米松杭の活用

三菱地所は、1918年(大正7)に建築した東京駅前のシンボル「丸ビル」の建替えにあたり、ビルの基礎として土中に埋め込まれていた北米産のオレゴンパイン(米松杭)5443本を掘り出した。この杭をどのように利用するか、建材・家具材など検討したが技術やコストの制約から、約100トンのチップに加工して封筒やノートに再生すると新聞に報道(2000年8月)。

この小さな記事に反応したのは全国でたった3人。その一人が家具作家「木楽舎の荻野雅之」である。

“樹齢100年、丸ビルを支えて100年、これから100年子どもたちのために”と、関東大震災を乗り越え、人目にも触れることなく、丸ビルを支えた材をこれからさらに100年、21世紀の社会を支える子どもたちの豊かな心をはぐくむために使いたい。と提案、採用され70本を譲り受け、つみ木を製作。

(社団法人 林業新知識 つみ木物語より抜粋)

□積み木で夢をつくる

・・・積み木のことを書く。取材したのは東京の葛飾区奥戸にある「あすなる幼稚園」だ。
・・・積み木は指先を使うし、積み上げるには集中力がいる。テレビゲームも同じだが、違うのはゆっくりとした時が流れていることだろう。一つ積んでは考えて、考えてはまた一つ積む。積んでから崩れないかを見守る。

創るのは、他のだれのもでもない、自分の夢だ。

・・・積み上げる子、積み木を集めてくる子、口を出す子、役割の分担もある。いつのまにか、あまり話しをしたことのない子と一緒に何かを創っていることもあるし、無口で引っ込み思案の子がみなに作品をほめられて声を出すようになる。これも積み木効果の一つなのだろう。

積み上げていくうちに崩れることがある。最初は泣く子もいたが、今は、崩れてもめげない。積む、崩れる。また積む。それが醍醐味になる。失敗しても失敗しても、しんぼう強く繰り返せばいつか夢がかなうことも学んでゆく。

(辰濃和男 日本エッセイスト・クラブ専務理事、〇〇から抜粋)

■ 主要紹介記事等(抜粋)

□ つみ木おじさんの夢

私も、荻野ファミリーによる「つみ木広場」に参加してみた。

子供たちは、つみ木を見ただけで、走り寄って来る。そして黙々と積み始める。その作品ができた頃を見はからって、子どもたちをカーペットの外に出してから、荻野さんが声をかける。

「よくできたね。みんなお友達の作品を見て、ほめてあげよう。これは誰かな、拍手一つ」。

ひとつおりの鑑賞が終わると、次が問題だ。

「さあ。いち、にの、さん、で、みんながびっくりするようなことを次はやるよ。自分の作品の前に、みんな座って。つみ木さんありがとう。両手を広げてそっと作品をつつみ込んでやさしく抱きしめてあげよう。いち、にの、さん」。

ばらばらと崩れる作品。あっけにとられて立っている子供たちに、今度はこう言う。

「さあ、もう一度つくってみよう。つみ木はね、何度もやり直しができるんだよ。自分だけでつくってもいいし、みんなで協力してつくってもいいよ。次は、必ず前よりも素晴らしい作品になるんだ」。

ある子は、自分よりも素敵な作品をつくっていたお兄ちゃんのところへやってくる。着ている服の下の方をちょっと折り曲げて、そこに自分の使っていたつみ木を入れて持ってくる。

こうして子どもたちは、「失敗しても何度でもやり直せばいい」、「他人のつくっていた物をまちがって触れてしまっても崩れたら、ちゃんとあやまって、一緒につくり直せばいい」ことを学んでいく。

森の木は、黙って立っているが、人間たちが何をしてきたかをみんな見て、知っている。だから、人工林の手入れされていない森を人間が間伐し始めて、それが人間の子どもたちの教育に使われるようになったら、子どもたちを「森を愛する人に」育ててくれるに違いない。

(天野礼子、アウトドアライター、森林組合No.449、抜粋)

■ 主要紹介記事等(抜粋)

□ 小さいから可能性無限

プレールームのドアを開けると、ヒノキ特有のさわやかな香りが鼻腔(びこう)を刺激した。群馬県安中市の安中二葉幼稚園で開かれた親子積み木大会。始まってから1時間で、ヒノキの積み木から放出された香りが天井の高い空間を満たしていた。

年長組の20数人と親を合わせて約50人に対し、積み木は1万5千個。子どもが握れるぐらいの小さくて軽いのが、一人当たり300個になる。これだけたくさんあると、スケールの大きな物ができる。子ども同士、あるいは親と独自のデザインに挑戦だ。

女の子と母親は搭を積み上げていた。搭の内側にもう一つの搭がある複雑な形をしている。女の子は長方形の板を内側にも、外側にも、一枚一枚そっと載せていく。震えたりして、ちょっとでも手元が狂えば、せっかく作った作品が壊れてしまうから、真剣そのものだ。もう、百回もそうやって積んだだろう。

おのずと静かな雰囲気。何かの拍子で崩れたときに「わーっ」という大声が聞こえるが、あとは落ち着いた話し声の世界だ。走り回る子もいない。1時間あまり遊んで休憩15分。また1時間遊ぶと、積み木の担当教諭が全員作品介绍した。

「この高い塔を作ってくれたのは誰かしら」。2メートルもある作品は男の子が母親に持ち上げてもらいながら作った。「もっと作りたい」「どこまで」「天井まで」

園長の吉田照悟は「積み木なら1時間たっても集中して遊ぶ。話を聞くときは15分しかもたない。積み木は集中力の鍛錬になる」と話す。ありふれた遊具の積み木。この積み木が何百個あると、何ができるか、無限の可能性が出てきて、集中力が続く、と吉田は考える。

(高知新聞○月○日 育てる 次世代への贈りもの 抜粋)

■ 主要紹介記事等(抜粋)

□子どもが日本の積み木で、パーティーをした

この荘厳な積み木のタワーは、積み木のワークショップに参加したスワフィールド小学校の子どもたちが共同して製作したものである。

日本の山梨県の工芸家である荻野雅之氏は、8年前に(息子のために)積み木の製作を始め、森の間伐材から3つのデザインの積み木を作った。「クラフトフェアに初めて積み木を出品したところ、テーブルの上に子どもたちの積み木の作品が残されていたことに驚いた。そこで、学校のために積み木を用いたワークショップを開発した」と荻野氏は語る。また「積み木のワークショップは、積み木で遊ぶ以上のものがある。子どもは自分自身について、友達について多くのことを学ぶことができる。散漫な子どもであっても、自分の製作に夢中になる」と話す。

この積み木のワークショップは、日本の学校でも楽しまれている。現在、ロンドンの小学校でワークショップを行っている。

(ロンドン地元紙、06年5月24日、抜粋)

□入院中の子ども積み木に夢中

山梨大医学部付属病院の小児科病棟が取り入れている「積み木療法」が、入院中の子どもや保護者らに好評を得ている。真剣な表情で積み木を重ねていく子や、ヒノキの手触りを楽しむように積み木と戯れる子……。創造力や集中力がはぐくまれるほか、治療を離れて医師や看護師とコミュニケーションを深める機会としても期待が高まっている。

同病院では4月から月1回、小児科病棟のプレイルームで行っている。今月20日のワークショップには子ども約10人と医師、看護師らが参加。約6千個の積み木を使ってそれぞれタワーや街を作り上げると、互いの作品に拍手を送り合い、子どもたちに笑顔があふれた。

同病院の担当者は「子どもたちが夢中になれることをやらせてあげたい。長期闘病中の子どもたちにとって、楽しみが先にあることは前向きに治療を受ける上で大きい」と話す。

保護者も「(子ども)がベッドの上では甘えて離れないが、積み木で遊ぶ時は積極的になるようになった」と効果を実感している。

(山梨日日新聞、08年8月25日、抜粋)